

▲企画展

「生誕100年記念
伊馬春部展 一向三軒両隣の時代」

9月27日(土)～11月30日(日)



生誕一〇〇年を迎えた八幡西区木屋瀬出身の劇作家・伊馬春部の生涯と業績を展望する展覧会を開催しました。ご遺族や地元の方々からご提供いただいた自筆資料や放送台本などを展示。ラジオ、テレビ、映画、演劇、小説、作詞と、縦横な創作活動で戦前戦後のお茶の間に娯楽を届けた郷土の作家の全体像に迫りました。

展示資料約一〇〇点
入場者数二二〇〇人
(イベント含む)

+++++
岡野弘彦さん 講演会
「伊馬春部の文学と人生」
10月29日(水)
+++++

本展開催を記念して、伊馬春部とともに折口信夫(釈道空)に学んだ歌人で、国文学者の岡野弘彦さんにご講演いただきました。伊馬春部の紹介で、戦後、折口宅に寄宿。最も身近で看取った折口の晩年や文学世界、その中の伊馬との交流などについてお話しくださいました。

私は伊馬春部さんの弟弟子なんですけれども、折口信夫先生が四十代になられた頃、当時の國學院大學予科の学生たちが先生を囲んで短歌を創作することを核とした古典研究会「鳥船」という結社を作りました。藤井春洋さんなど創刊同人に次い

で、伊馬さんが入学され、「鳥船」の会員となられていました。その最も末輩の弟子として、私は昭和二十一年に「鳥船」に加わりました。

その時はまだ伊馬さんは外地におられ、兄弟子たちもほとんどが帰って来ていません。やがて年が変わって、二十一年になり、引き揚げて来る先輩たちが増えてきて、伊馬さんも中国から帰って来られました。

折口先生を核にした会での伊馬さんの進行は、実に柔らかくて、優しく、同時に凛としていました。進行係によって、歌会の雰囲気というものは変わります。「あのムーラン・ルージュ

新宿座の作者として評価の高い伊馬春部さんというのは歌の会でこんな見事な司会のできる人なんだ」と思いました。

折口信夫という人は、現代を突き抜けたような人でした。伊馬さんにとっても、また、伊馬さんについて考えようとする人間にとっても、大きな問題は、この折口信夫という存在です。その出会いや師弟関係を見ていると、人間にはこれほど影響力を与える人がいるものか、と思うほどです。

伊馬さんはご存じのとおり、当地のご出身でありまして、由緒ある豊かな家に生まれたわけですが、不幸なことに、早く



岡野 弘彦さん